2024
J・A・C

秋田山岳

令和６年８月　発行
No.　131

公社団法人 日本山岳会秋田支部
秋田市外旭川八幡田
2-1-9 小松方
TEL・018-868-5445
発行者　佐藤和志
編集者　高橋雄悦

令和６年度春の支部山行

春の支部山行　母谷山へ

鎌田倫夫

令和六年度春の支部山行は八峰町の母谷山（二七五・九メートル）とした。

六月一日、天候の心配が多少あったが、運に任せて秋田市の集合場所を出発。

能代山本広域農道を走り登山口のある八峰町に着く。林道は整備されているが前回登った際には被さった草木に苦労した記憶があり、広域道脇の「日上神社」鳥居脇に車を駐車して歩き始めた。

途中、大きく成長したタラノメやワラビを見ながら収穫する人がおらないのか気になる。

林道の終点には鳥居と母谷山の標柱があり これより急登が始まる。以前、登ったときと比べ刈払いされていない様でとても荒れた登山道であった。

補助ロープが取り付けられた場所を過ぎると間もなく山頂である。山頂一帯の広場はシダ類が生い茂り、山頂神社の扉は外されてあった。多少収穫時が過ぎたワラビを採取しながら下山した。

車をとめた日上神社は参加者全員一度も訪れたことが無く全員で参拝して帰路につく。

参加者　柳田勇悦　佐藤　博
三浦昭男　小松芳美
鎌田倫夫
会員外　二名

初のゆっくり山行　寒風山を楽しむ

三浦昭男

これまでの山行とは趣を変え、里山や草花を見ながらのゆっくりの山歩き、新たな取り組みである。

計画は男鹿の寒風山（三五四メートル）とし、火口を一周する「外回りコース」とした。

六月二十二日、出発地点の妻恋峠に集合。参加者十三名、鎌田副支部長の挨拶後出発した。

「姫ケ岳」の登山道は急斜面の直登で喘ぎながらの登り。頂上で小休憩をとった後、尾根筋を少し下り「蛇越長根分岐」を通過する。草木が茂る道や岩の露出した道を過ぎると、急な下り坂になる。見通しも利かない程の藪に手間取ったが、下り終えた地点が「蛇越長根北登山口」である。まもなく「鬼の隠れ里」に到着、ここで昼食休憩とした。

昼食後、次の地点に向け出発する。やや急な上り坂と、広々した草原の道を通り、「板場の台」に到着する。寒風山全容を望む展望台である。ここから緩斜面を下ると県道に出て、その先に寒風山への登山口がある。寒風山頂上への道は、中腹から急登になり、頂上の展望台が見えてもなお続く登りは

本日一番の難所だったのでは。やっとの思いで頂上に着く。全員無事の登頂となった。（天気は曇り時々晴れ）

参加者　柳田勇悦　今野昌雄　鎌田倫夫　佐藤　博　柴田　勧　佐藤英實　後藤浩二　小松芳美　三浦昭男　会員外　四名

福島で東北・北海道地区集会 第３９回は秋田開催

小松芳美

第三十七回東北・北海道地区集会が七月十二、十三日、福島支部主管で開催され、秋田支部からは今野顧問、鎌田副支部長、小松が出席した。

開催地は裏磐梯のリゾート地で、近くには小野川湖、五色沼、磐梯山などの景勝地が位置し大勢の観光客が訪れていた。

式典に先立つ支部長会議には鎌田副支部長が出席、二年後の秋田開催を促され、快諾した。

式典は、佐久間事務局長の司会で進行。渡部支部長あいさつに続き、支部員で奥会津郷土写真家・星賢孝氏が、「世界を魅了する奥会津・只見線」と題して記念講演。豪雨災害から復興を果たし、地域活力の原動力となった自らの経験を熱く語った。

懇親会はバイキング方式。秋田支部は、今野顧問宅付近の造り酒屋「刈穂」の清酒・六舟を持参しPRに努め、支部あいさつでは鎌田副支部長が、参加者の紹介、支部の現状や抱負を語った。

また十支部の参加者が壇上に上がり、支部の特色などを報告した。

二日目は支部からの参加者全員が登山コースに挑戦し、八方台登山口から猫魔ケ岳と猫石コースを堪能し、特に頂上からの磐梯山、猪苗代湖などの絶景に感動した。

同コースは整備が行き届いて歩きやすく、ブナなどの広葉樹や爽やかな風には疲労回復の効果があった。

他支部からの参加者がスマホを落とすアクシデントがあったが、福島支部の無線を活用した連絡網の強化により事なきを得るなど、細やかな山行運営が際立った。

データ　会場までの距離三三六キロ。式典参加者七十六名。猫魔ケ岳一四〇三メートル、猫石一三三六メートル、行動時間三時間四十一分、距離五キロ、累積上り四〇〇メートル

水と緑の森林祭に初出展

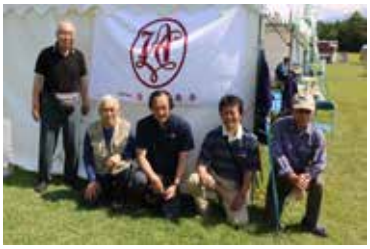
高橋雄悦

県主催の「２０２４あきた水と緑の森林祭」が七月六日、由利本荘市の鳥海高原由利原青少年旅行村で開かれ、来場者に秋田支部の活動をアピールした。本会が森林祭に参加するのは初めて。

会場に設置された事業者出展用のテントの一角に陣取り、現在会として取り組んでいる「全国山岳古道調査事業」を紹介するリーフレットや入会案内のチラシを配布した。併せて、秋田支部の会報や設立六十周年記念誌、キナバル登山報告書などを展示し、歴史と伝統を誇る秋田支部の認知度を高めてもらえるよう努めた。

山岳会らしい雰囲気を演出しようと、鎌田副支部長が持参したピッケル、ユマール（登高器）、ザイル、エイト環、それに年代物のアイゼンなどの用具をテントの一角に展示した。通路沿いには佐々木、鈴木両顧問から拝借した法被や登山関連書籍を並べた。

バーナーで沸かしたお湯でいれたドリップコーヒーのサービスが人気。かぐわしい香りに誘われた通行人がテントを次々と訪れては、山の話題で会話が弾んだ。新たなPRの場を提供いただいた歩仁内会員の尽力に感謝したい。



参加者　鎌田倫夫　三浦昭男　後藤浩二　小松芳美　高橋雄悦

山岳古道調査本部会議

小松芳美

六月三日オンラインで開いた。本会からの報告は次の通り。

・総会を目処にホームページへの掲載を考えている。ウェブデザイナーと相談して掲載方法などを検討する。現在は六十ぐらいの報告があるが、多くが未完成。個別にお願いしたい事項がある。ホームページに掲載後の質問は、担当支部に回答をお願いする。

・五月十五日開催の熊野古道の調査・集会は全国から会員外も含め約百四十人が参加した。

野田登山口を刈り払い

歩仁内　昌樹

六月二十七日から三十日にかけて、太平山の野田コースにて刈払作業が行われた。

昨年の縦走コース（中岳～奥岳）に続くもので、河辺山歩会の二木氏と石塚氏をリーダーとして、中央地区山岳協議会所属の各山岳会会員が協力。当会からは鎌田副支部長、小松事務局長、歩仁内がそれぞれ一日参加した。

ご存知の通り太平山旭又コースは昨年七月に発生した大雨により林道及び登山道が壊滅的な被害を受けており、復旧には二年を要するとも言われている。

初心者でも気軽に登ることができる旭又コースの早期復旧が望まれるが、野田コースが整備されて、登山者の選択肢が広がったことは意義のあることだと思う。

とりわけ野田コースは三吉神社奥宮への表参道である。七月二十七日には御神体の遷御が行われている。「信仰の山」を体験するのであれば、このコースを登るべきである。と、偉そうなことを書いてしまったが、私が野田コースを登ったのは十一年ぶりだった。裏道ばかりを歩いていた…。

久しぶりに「不動滝」を見たが、訪れる人は少なくなっても滝の流れは以前から変わっていないのだろうなあと感じ入るものがあった。

後日、慰労会が開催され、佐々木民秀顧問の出席もあり、他の山岳会会員とも様々な情報交換をすることができた。

秋田魁新報　題字下広告

八月十一日付一面掲載

本年度第一回支部連絡会議

小松　芳美

五月三十日にオンラインで開かれ、本部から橋本会長以下役員、各支部から支部長、事務局長らが参加した。協議結果は次の通り。

▽入会申し込みがネット等でも可能に（七月から）＝各支部では入会者と連絡をとり紹介者の氏名・アドレスなどを教示。入会希望者はネットなどに入力し申し込む。支部の紹介者にネットで入会申し込み結果の連絡が入る。紹介者の印鑑は不要となる（従来の紙での申し込みも併用）。

▽会報「山」電子版の推進＝経費削減等から電子版の利用を推進する方針であり、支部員へ周知するとともに、希望を確認していただきたい。紙も併用予定である。紙の希望者からは郵送代をいただくことを検討している。

▽山岳環境基本法の成立に向けて＝環境省、林野庁、国交省などが関連し、議員立法で成立を目指す。山岳環境の課題と解決方法等の勉強会を開催中。ＪＡＣの役割も大きく、支部の皆様にも関心を持っていただきたい。

▽全国支部懇談会の開催に向けて＝関東圏での開催が多く、今後は東北・北陸・中国・九州の支部での開催を目指したいので開催に手を挙げていただきたい。

▽支部連絡会開催時期＝三カ月に一回の開催を目指す。

▽支部行事への本会理事等の派遣要請＝ホームページに様式があるので活用していただきたい。

中央地区山岳協議会総会

小松　芳美

中央地区山岳協議会（佐々木民秀会長）は六月八日、三吉神社斎館で総会を開き、令和五年度事業報告、収支決算報告及び監査報告、令和六年度事業計画案及び収支予算案などを、いずれも原案通り承認した。

議案では、秋田市スポーツ協会への負担金が年額一万円に引き上げられたこと、及び諸般の事情により同協会から脱会することを決定した。

役員改選では会長に佐々木民秀、理事長に工藤伸二、会計に石塚稔、監事に橋本隆之（理事は各団体から十三人）の各氏が選出された。

出席者　小松芳美　高橋雄悦　太平山警備員会から　佐々木民秀　佐藤博

会報「秋田山岳」編集者退任のご挨拶

鈴木裕子

平成十七年に前編集者から引継ぎ、第六十三号から令和六年二月発行の第一二九号まで会報の編集を担当してきたが、一三〇号編集半ばの三月下旬に体調を崩し、未完のまま、次期編集者の高橋雄悦委員に引継ぎをした。

平成十七年当時はワープロで印字し、レイアウトや表題は印刷所で行い、何度も校正する作業であった。佐々木民秀前編集者（当時支部長）の指導を受け、印刷業者との対応は支部長であった。

会報発行の経緯は、支部設立四十周年記念として平成十一年に発行された「会報合本第一号」の「あとがき」に、佐々木民秀支部長（当時）が、

「昭和三十四年支部設立から間もなく、第一号、第二号を保坂隆司氏が発行したが、国体競技部門で多忙を極め、発行休止を余儀なくされている。昭和四十一年二月、当時常務委員の佐藤兼治氏（四代目支部長）が担当し、久々の第三号、第四号、第五号を発行したが、支部事務所が横手市に移転、以後、十五年の長きにわたって支部報の発行が休止し、この間の支部活動や事務報告等の記録が途絶えてしまっている。

昭和五十七年八月、岡田光行氏が三代目支部長に就任し、小生（当時常務委員）が会報を担当し、十六年ぶりに第六号を発行、以来、連続発行している。」（一部抜粋）」とある。

佐々木民秀顧問は第六号から長きにわたって編集を担当しており、ご指導を受け、常に校正もお願いしてきた。私は支部活動を出来るだけ網羅して掲載し、会報だけで支部の歴史がわかるようにと努力してきた。

会報の表紙は、第一号作成の保坂隆司氏がイメージした「霊峰太平山の山並み」であり、第六号からの「秋田山岳」の題字は岡田光行氏（第三代支部長）の書である。

先輩達が思い込めて作成し、発行してきた「秋田山岳」に携わることが出来たことを嬉しく思います。

歴史ある「秋田山岳」の発行が末永く続くことを願って、編集者退任の挨拶といたします。

お詫び　会報一三〇号の編集後記中、「会報は支部の顔である」と話されていたのは、佐々木民秀顧問でした。訂正してお詫びします。

秋田駒ケ岳の山開き

六月一日に秋田、岩手両県から約百二十人が参加して記念登山などを行い、シーズン中の安全を祈願した。八合目で佐藤支部長も参加して神事。南八幡平山岳会と雫石町山岳協会の関係者らが男岳山頂でピッケル交換を行った。

参加者　今野　昌雄　高橋吉一　鈴木加代子　畠山　靖

会務報告

○事務局会議

七月十日、秋田市泉コミセンで郵送書類の取りまとめなどを行った。郵送したのは①山の日山行の案内（八月十一日、小白森山・大白森山）②ゆっくり山行の案内（九月二十一日、房住山）③創立六十五周年記念式典の案内（十一月二十三日開催予定、第一報）④65座ラリーの途中経過報告書

出席者　鎌田倫夫　後藤浩二　三浦昭男　小松芳美

訃報

今野秀穂さん

No.八二二七（山形県天童市）

二月二十九日逝去

（享年九十二歳）

高橋忠雄さん

No.一二〇〇三（秋田市）

七月十七日逝去

（享年九十二歳）

ご冥福をお祈りいたします

支部会員執筆図書の紹介

分県登山ガイド秋田県の山

第二刷　佐々木民秀著

A5判百四十四頁

山と渓谷社、千九百円＋税

令和六年二月刊

大江氏と大平永井氏・そのルーツを辿る

佐々木民秀著

B5判一四二頁

非売品、令和六年五月刊

我が人生に悔い無し

長岩　嘉悦著

B5判四二頁

非売品、令和六年六月刊

編集後記

長年編集を担当された鈴木裕子顧問からバトンを受け継ぎ、本号から会報を担当することになりました。歴史と伝統ある秋田支部の活動を後世に伝えるため、正確かつ充実した会報を心掛けて編集作業に当たりたいと思います。よろしくお願いします。（高橋雄悦）